



アクティブ・ラーニングで『羅生門』

齋藤 祐 中央大学杉並高等学校



定番教材の活性化

現在刊行されているすべての『高等学校 国語総合』教科書で、芥川龍之介『羅生門』が取り上げられている。では、この定番教材を、アクティブ・ラーニングによって活性化することは可能だろうか。以下、近年勤務先で実施した、授業実践の報告を試みたい。

1 範読より班読

教室で教員が教科書を範読すると、生徒は寝る。かといって、個別に指名して読ませると、声が小さくて聞こえない。こんな悩みをもっている現場の先生は少なくない。かといって、初読の作業

を黙読で済ませてしまうと、授業の後半になつてしまつてからようやく、生徒の初歩的な誤読が判明することがあるから、やっぱり音読は外せない。ならば、教員が範読するのをいったんやめてみよう。

やり方はこうだ。クラスを三〜四人の小さなグループに分け、形式段落ごとに交代で音読させてみる。読む順番をじゃんけんで決める、つかえたら次の人に回すなど、ちょっとゲーム的な要素をつけ加えてもいい。まづたくもつておもしろくなかつた初読の授業が、またたくまに賑やかなになる。読めない言葉、意味のつかめない言葉があれば、その場で共有し、板書で解説してしまふ。「読めない」、「知らない」は決して恥ずかしいことではないのか? という「問い」だけを設定し、付箋を使って場面を整理させてみた。「下人はなぜ老婆の身ぐるみを剥いだのか?」という「問い」は、「下人はどうして羅生門の下へやってきたのか」(手引き二)や、「下人は老婆の話をどのよう受け止めたのか」(手引き四)という、「具体的な問い」を内包している。「問い」は同じでも、根拠とする場面や「答え」(解釈としての仮説)が多様化するため、いざ発表したときに生徒たちは新鮮なものとして受け止める。グループワークでの精読成果を使うことによって、独自の語り口による発表が可能となるだろう。ここで大切なことは、付箋を使った場面整理までをグループワークで実施するものの、最終的な発表原稿(発表が三分なので九〇〇字程度)の作成は個人作業にすること。自分ひとりでは書けない生徒でも、グループワークで論証の骨組みができていれば、それらをつないでいくことで自分なりの発表原稿を書き上げることができる。



3人で班読する

はない。だってここは、間違えてもいい「教室」なのだから。グループでの「班読」(言うまでもなく造語)は使える。

2 「手引き」もグループワークで

アクティブ・ラーニングにおける教材読解において、「学習の手引き」は大切な下読みを支えてくれる。三省堂版「学習の手引き」は次のようになっている。

一 この作品の背景となっている京都の町や羅生門の描写に注目し、そこ

に描かれている当時の社会状況についてまとめてみよう。

二 下人が羅生門の下に至るまでの経緯をふまえ、門の下での下人の心情についてまとめてみよう。

三 楼上に上つて以降の下人の心理の推移を、箇条書きにして整理してみよう。

四 老婆は自分の行いについてどのように語っているか、また、下人はそれをどのように受け止めているか、整理してみよう。

手引きを使って、班読を行ったグループ内でディスカッションし、各々の手で整理させる。教員は机間指導しながら適宜アドバイスをを行うことで、読みの精度を保ちながら、主体的な読解を促すことができる。加えて、毎時の「読み」を「ふりかえりシート」などを使って記録しておく、次時の導入にもなる。

3 発表原稿づくり

「学習の手引き」を使った精読作業のあと、さらにもう一步踏み込んで、プレゼンテーションへ発展させてみよう。今回は「下人はなぜ老婆の身ぐるみを剥い

だのか?」という「問い」だけを設定し、付箋を使って場面を整理させてみた。「下人はなぜ老婆の身ぐるみを剥いだのか?」という「問い」は、「下人はどうして羅生門の下へやってきたのか」(手引き二)や、「下人は老婆の話をどのよう受け止めたのか」(手引き四)という、「具体的な問い」を内包している。「問い」は同じでも、根拠とする場面や「答え」(解釈としての仮説)が多様化するため、いざ発表したときに生徒たちは新鮮なものとして受け止める。グループワークでの精読成果を使うことによって、独自の語り口による発表が可能となるだろう。ここで大切なことは、付箋を使った場面整理までをグループワークで実施するものの、最終的な発表原稿(発表が三分なので九〇〇字程度)の作成は個人作業にすること。自分ひとりでは書けない生徒でも、グループワークで論証の骨組みができていれば、それらをつないでいくことで自分なりの発表原稿を書き上げることができる。

4 プレゼンテーション

発表原稿が完成したら、いよいよプレゼンテーションだ。付箋で整理した内容

のコピーを提示しつつ、自身で用意した原稿を読み上げる。



プレゼンテーションの様子

発表相手は二〜三名。教員は、タイマーを使って時間の管理だけをしてあげればいい。

解釈を付箋で組み上げたグループをバラバラにして、発表のための三〜四名のグループを新たに作り、その中で発表を行う。これならば、全員が1コマの授業の中で発表を行うことができ、かつ、自分とは異なった語り口の発表に複数接することができる。

定番教材だって、やり方次第で、もっとおもしろくなるのではないだろうか。